

デフサッカー 日本代表 古島啓太(ふるしまけいた)さんの講演

12月1日、奈良ろう学校にデフサッカー日本代表の古島さんが来られました。給食後、運動場でミニサッカー教室を実施しました。サッカーに興味がある児童と生徒が運動場で一緒に汗を流しました。その後13時半から講演がありました。

講演内容は①自己紹介、②サッカーとの出会い、③デフサッカー日本代表13年目、④デフリンピックでした。内容を簡単に紹介させていただきます。

①自己紹介 大阪府守口市に生まれ、大阪市立聴覚支援学校の幼稚部、大阪市立小中学校、私立高校、大学を卒業後、住友電設株式会社で勤務しながらパラアスリート選手として活動されています。

②サッカーとの出会い 父親や兄の影響で地域のクラブでサッカーを始めました。サッカーはチームスポーツでコミュニケーションを取ることが大変でしたが、周りの助けもあり、大好きなサッカーを続けました。成人式するとき、たまたま友達の誘いでデフサッカーに出会われたそうです。

③デフサッカー日本代表13年目 現在、副キャプテンを務められています。昨年開催された『第4回ろう者世界選手権大会』で初めて準優勝を果たされました。

④デフリンピックとは『聞こえない人のためのオリンピック』 オリンピックやパラリンピックと同様に夏季・冬季があり、それぞれ4年に1度開催されます。デフリンピックのルールはオリンピックとほぼ同じですが、補聴機器などを付けることは禁止されています。そのため、スタートの合図を音の代わりにフラッシュランプで知らせたり、ファウルやオフサイドのときはフラッグ(旗)を上げたりして目で見て分かるように工夫されています。



古島さんが講演で提示された写真を引用

さらに、古島さんからのクイズなどがあり、デフリンピックについてよく分かりました。児童生徒からの質問にも答えていただきました。小学部の児童が「どうやったら、日本代表になれますか?」の質問に「デフサッカー日本代表にはサッカーが強いだけではなれないよ。マナーを守ることや気配りが大切になってくるよ。」と教えていただきました。(文責 中田)

生徒の感想

- ・デフリンピックの知名度を上げるために、私たちも協力したいと思いました。
- ・デフリンピックが東京で開催されると知り、行ってみたいと思いました。
- ・ろう者が競技に参加する際の情報保護について知ることができて嬉しかったです。
- ・自分も夢に向かって頑張ります。



中耳炎について



小さな子どもは風邪をひいたり鼻水がでたりすることが多くあります。そんなときに耳鼻科を受診すると「中耳炎」と診断されることがあります。子どもによくみられる中耳炎は「急性化膿性中耳炎」と「滲出性中耳炎」に分けられます。今回はこの2つの違いについて説明します。

「急性化膿性中耳炎」

一般に「急性中耳炎」と呼ばれるもので、ほとんどの場合、風邪をひいたあとに喉や鼻にいるウイルスや細菌が、耳管を通して中耳に感染して起こります。発熱などの風邪症状に加え、耳につよい痛みが多く見られます。特に小さな子どもでは、症状をうまく訴えられず、耳に手をやったり、ぐずったりすることがあります。また大人では、発熱や痛みのほか、耳が詰まった感じや難聴も自覚します。

「滲出性中耳炎」

急性化膿性中耳炎が治りきらなかったり、何度も繰り返していると起こる病気です。滲出性中耳炎は、軽い難聴のみで痛みはあまりありません。そのため子どもは自分で痛みを訴えることはほとんどありません。補聴器の故障でもないのに普段より反応が悪い場合は「中耳炎」を疑ってください。中耳炎の慢性化は聴力低下にもつながります。

※どちらの場合も、気付いたら早めに耳鼻科を受診することをお勧めします。

参考文献：神崎仁（2001）『これだけは知っておきたい耳・鼻・のどの病気』

☆中耳炎予防のために・・・

風邪をひいたら、こまめに鼻汁を取り除いて、鼻の細菌やウイルスが中耳に行くのを防ぐことです。そのためには正しく鼻をかむ必要があります。続いて、正しい鼻のかみかたを紹介します。



意外と知られてない？ 正しい鼻のかみ方



○ or ×

☆確認してみましょう！

| | |
|---------------------------------|--|
| 1, 普段から鼻水をすすらず、鼻をかんでいますか？ | |
| 2, 鼻をかむ際、反対の鼻を押さえて、片方ずつかめていますか？ | |
| 3, 一度に力を入れず、ゆっくり、少しずつかめていますか？ | |
| 4, 不十分に感じたらこまめにかめていますか？ | |

すべて○になりましたか？ すべて○になるよう心がけましょう！

花粉、ホコリなどが入ったとき、これらを体の外に流し出そうとして鼻水が出ます。そして、ウイルスや細菌等に感染すると、膿の混じったどろっとした鼻水になります。鼻水はすすって戻すのではなく、鼻をかんでできるだけ出しましょう。鼻汁が残ると、その中でウイルスや細菌がさらに増えてしまいます。

また、鼻づまりがひどいときの鼻汁は、奥の方であって、しかもどろっとしたものです。いくら強くかんでも中々出てきません。まちがった鼻のかみ方では、鼻血が出たり、圧力で耳が痛くなったりしてしまいます。子どもの耳管は短くてまっすぐなので、鼻をすすった拍子に鼻水が耳までいってしまうことがあります。そのため、鼻水は絶対すすってはいけません。中耳炎の原因になります。普段から正しい鼻のかみ方を心がけましょう。

参考文献：池田美智子（1997）『子どものための耳鼻科バイブル』.筑摩書房